

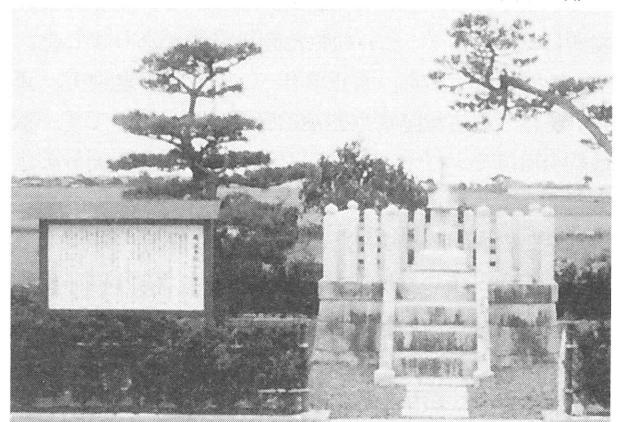
「功名が辻」の舞台・米原市

山内一豊は天文14年(1545)7月、山内但馬守盛豊の子として尾張国の黒田城(愛知県一宮市)、あるいは岩倉城(愛知県岩倉市)に生まれたと言われています。父・盛豊は信長との争いの中で戦死し(1559)、その結果、一豊と母の法秀院や弟妹は流浪することになりました。そうして流れ着いたのが米原市宇賀野の長野家でした。母、法秀院は長野家に身を寄せながら付近の子どもたちに裁縫や書、行儀作法を教え、その中には一豊を内助の功で支えた賢妻として知られる千代もいました。一豊と千代が結婚したのは、1560年代末~1573年前後のことと考えられています。法秀院は一豊が長浜城主になった翌年(1586)までこの地に住み、宇賀野には今でも法秀院の墓が残されています(右写真)。

さて、一豊は主を転々と変えながら、1560年代末頃には秀吉の配下となり、各地で軍功を挙げていました。そして、天正13年(1585)、かつて秀吉の居城でもあった長浜城の城主になりました。長浜城は北陸を睨む要所であり、また、西は琵琶湖に接し、近くには古来より海上交通の要衝であった朝妻湊がありました。『佐加太

第22号』で紹介した古文書はこの頃のものです。その後、一豊は天正18年(1590)まで長浜城主を勤めた後、掛川城主を経て、最後は土佐24万石の大名となりました。以後、一豊は慶長10年(1605)まで生きて領地支配に努めました。夫の死後、千代は出家して見性院の法号を受け、元和3年(1617)まで生きました。

(高畠光昭)



▲法秀院の墓

情報 BOX

◆米原市伊吹山文化資料館では、下記の企画展を開催します。

第56回企画展

『山と湖の縄文文化ー米原市のあけぼのー』

会期：4月8日(土)→5月21日(日)

休館日：毎週月曜日

第57回企画展

『善の綱一播磨さんと伊吹山ー』

会期：5月27日(土)→7月2日(日)

休館日：毎週月曜日

※江戸時代後期に槍ヶ岳山頂に初めて登った播磨上人。その修行の基礎は伊吹山にあります。

◎問い合わせ先

伊吹山文化資料館 TEL0749-58-0252

◆米原市教育委員会では、下記の報告書を刊行します。

『米原町内中世城跡分布調査報告書』(第1集)

※国指定史跡鎌刃城跡をはじめ旧米原町内の中世城館を網羅しています。

『杉沢遺跡発掘調査報告書』(第2集)

※良好に検出された縄文時代晩期の合わせ口甕棺の調査

◆◆編集後記◆◆

合併後、文化財職員の削減・博物館施設の指定管理者制度導入■今、全国で文化財保護行政が直面しているいろいろな出来事に、ご多分に漏れず我々も遭遇しています。指定管理導入については、市内の特徴ある資料館が今までの活動をさらにパワーアップするようなシステム作りをめざしています■しかし、前回の「編集後記」の意気込みは何処へやら・・・。合併前まで、各担当がそれぞれの町で積み上げてきた実績や人脈を守ることに必死です■きっと他の合併市町村も同じではないでしょうか■今回の「佐加太」もわずか3人の執筆陣でお届けします。今年は終戦60年。今まで余り取り上げられてこなかった話題を中心に紹介しました■伊吹山の麓、琵琶湖のほとりに花開いた文化の香るまち「まいばら」。交通の要衝・交流のまち「まいばら」■言うは易し、行うは難し。実感している今日この頃です。ガンバルぞ！(シャンギリッ子)

米原市文化財ニュース

佐 加 太 第 23 号

発 行 平成 18 年 3 月 25 日

編 集 米原市教育委員会

〒521-0292 滋賀県米原市長岡1206番地
米原市教育委員会文化スポーツ振興課
TEL. 0749(55)8106

印 刷 立木印刷



佐加太とは、「和名抄」東急本の坂田郡の訓を引用しました。

第 23 号

2006年3月25日

- 特集：終戦60年 -

滋賀県米原市教育委員会

戦争に利用された野草のダイヤモンド—ヨモギ—

伊吹山文化資料館に1枚のチラシがあります。「ヨモギの葉を採集しましょう」「一石二鳥 活かせ天然資源」と大書され、坂田郡伊吹村春照(現米原市春照)の「伊吹艾生薬第一工場」が、昭和30年代頃に配布したもので、「児童の学費に」「旅行の費用に」「婦人会の費用に」「団体の事業費に」と、学校や団体に採集を呼びかけています。

伊吹山は古来から薬草の山として知られています。特に江戸時代には、幕府の採薬師がたびたび採集調査に訪れ、山麓にはもぐさを取り扱う農家や、春照の宿場町には商う店が5・6軒あったようです。近代になるとこのようなチラシが配布され、山麓の各小学校でも薬草採集を課題として取り上げ、上野や春照の業者が大量の薬草を集荷して、近江長岡駅から京阪神へ出荷しました。

さて、このもぐさの原料になるヨモギは、どこにでもある最も普通な多年草です。しかし、300種類近い伊吹山の薬草の中で、ずば抜けて薬効があります。そのままでもおひたしや天ぷらで食べられますが、煎じ煮詰めて咳止めや虫下し、手でもんで止血、若葉の青汁は高血圧など、お風呂に入ると神經痛や冷え症に、もぐさとしてお灸にと、さまざまな方法で薬効を表すことから、「名医草」「仙人草」の別名を持ちます。

また民俗的に、子どもの健やかな成長を願う雛祭に草餅を作り、端午の節句に軒先に吊るして病魔を払う風習が市内甲津原などで見られます。

さらに、黒色火薬は硝石と硫黄、黒炭を原料としますが、ヨモギには、硝石の原料となる硝酸を多く含んでいて、何度も醸酵させて純度の高い硝石を作り出すことができました。まさに野草のダイヤモンドと呼ばれるゆえんです。

しかし、戦時中にもぐさが重要な軍需産業であったことはあまり知られていません。昭和18・19年には、旧伊吹町で150万トンものヨモギを扱っています。県の補助によって春照に建てられた製造工場は、軍の管理下におかれました。納入先は海軍と陸軍の両方だったようですが、その用途は秘密にされ、もぐさ業界にも知らされ

なかたといいます。当時、種々の噂が流れたようで、高級モグサは防毒マスクの吸着剤や、火がつきやすいことから爆弾の導火用、硝火綿(ニトロセルローズ=爆薬)の原料にしたといわれています。下級品は、羊毛・綿花・パンヤなどの輸入が困難になったことから、その代用として飛行兵の防寒用服や、座席用のクッションなどに利用されていたと、帰還された兵隊さんが話していたそうです。

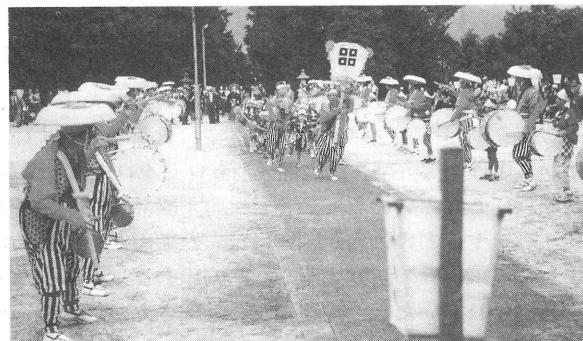


▲ヨモギ採集のチラシ(昭和30年代)

米原市のまつり ③ 大原学区の太鼓踊り

山東地域北部の大原学区では、姉川とその分水の出雲井を用水源とする16カ村（春照・高番、旧浅井町相撲庭を含む）の共同意識が高く、用水管理や雨乞いには連帯してあたってきました。

岡神社（米原市間田）はこの大原荘の総鎮守で、合同しておこなう雨乞いや返礼踊りは、村々によって歌詞や踊りの展開に相違があるものの同系列のものといえます。踊り順は年によって変わりましたが、宮元の間田は、踊り先陣の特権がありました。終戦直後、昭和22年の旱魃で踊られたあと、朝日地区だけが絶えることなく続き、国選択無形民俗文化財に指定されています。また、井之口太鼓踊りは市指定文化財で、近年は間田・天満・夫馬・鳥脇でも太鼓踊りが復活されました。



▲朝日豊年太鼓踊



▲天満太鼓踊

米原の戦争遺跡 — 列車壕 —

今年は終戦から60年、太平洋戦争も歴史になりつつあります。さらに戦争に関わる施設が文化財にも指定されるようになってきました。現在そうした施設を戦争遺跡と呼んでいます。ここでは米原に残された戦争遺跡として岩脇の列車壕を紹介したいと思います。

米原駅は東海道本線と北陸本線の結節点として、単なる鉄道施設ではなく、兵員を輸送したり、兵器を運搬する重要な動脈でした。このため、連合軍の攻撃目標となりました。この連合軍の空襲を避けるために計画されたのが列車壕です。

米原駅の北方、約2キロに「岩脇山」と呼ばれる小高い丘陵があります。この山に太平洋戦争末期に米原機関区の列車の一部を隠し置く列車壕がつくられました。当時は米原駅を出発した機関車が、東海道線上り線を進み、途中で西側に分岐し岩脇山に向かって一直線に進む予定で、線路と列車壕が築かれたのでした。線路は水田を斜めに突っ切るもので、近年まで残されていましたが、約10年前に実施された県営ほ場整備事業によって撤去されてしまいました。

列車壕はこの線路の延長線上、岩脇山の南側斜面に

2ヶ所残されています。列車壕を掘りながら、掘り出した碎石で線路の基礎を築く作業が進められていたようですが、完成することなく終戦を迎きました。現在未完の2つの列車壕が岩脇山にむなしく口を開け、無言で戦争の愚かさを語りかけています。

(中井 均)



▲岩脇山に残る列車壕跡

陸軍境 一玉の火薬庫

米原市藤川は、岐阜県に接する市の東端の集落で、隣村は関ケ原町の玉集落です。この2つの集落は深い関わりがあり、江戸時代、玉は上り物資を藤川は下り物資を扱う北国脇往還の宿場町でした。「陸軍境」の標柱は、両集落を分ける標高約338mの岩倉山の峰にあります。

伊吹山の麓。関ケ原メナードランドという遊園地やスケート場があり、現在でも鍾乳洞を訪れる人が多いこの場所に、「東洋一」といわれた陸軍施設がありました。「玉の火薬庫」です。大正3年（1914）の建設で、正式名称は「名古屋陸軍兵器補給廠関ケ原分廠」です。敷地約450haでナゴヤドームのグラウンド約330面分の広大な面積でした。

なぜこの場所が選ばれたのでしょうか。鉄道（関ケ原駅）に近いこと、まわりに岩倉山や城山のような小高い山があり、火薬庫の爆発を防ぐための土の壁が作りやすいこと。近くに人家がないこと。伊吹山周辺の上空は、気流が乱れやすく、敵機が飛びにくいくこと。湿度が適したことなどがあげられるようです。

全体を取り囲む二重の鉄条網。その内側は外からの火を防ぐため草木が刈られていました。この中に地下式火

薬庫29棟、半洞窟式15棟、山に掘った洞窟式5棟がありました。現在でも衛門や立哨台があり、スケート場の更衣室は半洞窟式火薬庫を利用していました。玉や藤川では「爆発したら村全体が吹き飛んでしまう」という不安を抱えていたそうです。しかし、玉の人たちは火薬庫内の農地を耕し、火薬庫に勤めたり、毎日食料を納めたりして、火薬庫を支えました。

（高橋順之）



▲「陸軍境」標柱

手記：弾薬庫での勤務

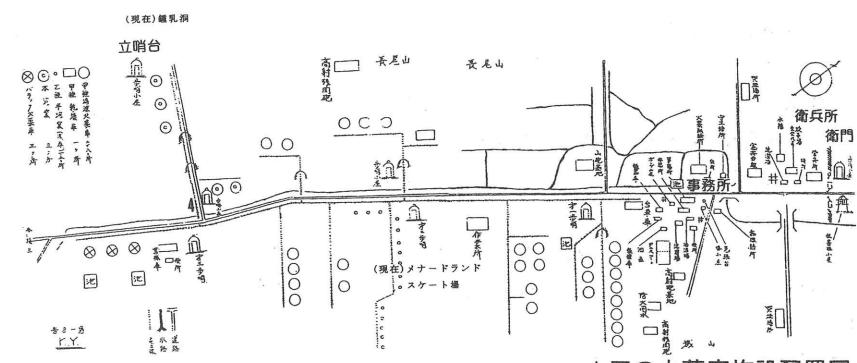
戦時中、関ケ原分廠と米原市高番地先にあった伊吹分廠に勤務されていた方の手記を紹介します。

「兵隊検査で丙種合格は応召が遅れたので、名古屋陸軍兵器補給廠関ケ原分廠の守衛の役職の一人として就職しました。関ケ原分廠といえば、不破郡玉村の山岳地帯を弾薬庫で埋め尽くした伊吹山麓のかくれた兵器庫でした。岩倉山の山なみと、東方古戦場城山とを円形にした外柵内は陸軍用地でした。内柵内の小高い山々はえぐられ、地下倉庫は各谷に奥深く各所洞窟倉庫として作られ、平倉庫は拾式号室まで建ち並び、その上に山土を覆い乗せ、松を植林、扉だけが拾式並んでおるだけでした。各倉庫へのトロッコ車の二線だけが空中からは見えただけでしょう。表門、衛兵はもちろん、各々倉庫前には歩哨兵が交代で何時も銃剣付で立っていました。弾薬入りの箱詰め満載の大型トラック車は国道よりの進入道路より時なしに入りしていました。軍属守衛班の私たちは、軍隊とは関係なく、内柵、外柵

問わず、ステッキ棒片手に巡回警備に当たったものです。

昭和18年6月20日付けで、突然大阪陸軍兵器補給廠伊吹分廠に転属を命ぜられ、所在たるや我がふるさと高番部落内一部春照地域内北の方、伊吹山麓寄りの松林地帯でした。毎日のごとく転送されてくる戦事燃料、石油にガソリンの大ドラム缶は野積みされ、各所に幾十本単位で堆積貯蔵が始まり、警戒責任は日増しに強まるばかりでした。事務所というより詰め所は現在の伊吹山麓総合体育館の西側でした。」

（伊吹町社会福祉協議会『戦時体験記録集 悲願』より）



▲玉の火薬庫施設配置図